

---

# 彼岸花は散る

佐上

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼岸花は散る

### 【Nコード】

N4462G

### 【作者名】

佐上

### 【あらすじ】

痛みが大嫌いの主人公香山菊壱は、ある日願えば叶う世界に招かれる。その世界で菊壱は自分の願いを叶える為に、個性的なキャラクターと共にいろいろしていく物語。

紅い空が広がる中、隣には親しい友、親友がいる。

一緒に歩きながら他愛無い話をする、うん、僕の自慢の親友だ。

今通っている通りの横に花が咲いている、否、大量の花束が置いてある。

そういえばこの通りは…

「ここで、友人が死んだんだ」

僕は立ち止まる。

あいつも止まる。

「小学校の時に一年間クラスと一緒に、何回か話した事あったし」

友人が死んだ場所を偶然でも通って何もせずに通り過ぎるほど僕は冷たい人間ではない。

静かにかがんで手をあわせる。

「どうせ知ったのはニュースか何かだろう」

あいつが歩き始めたので僕も立ち上がり歩いた。

「うん。昨日のニュースで流れてた」

追いついてから、あいつの質問に答えた。

はあ、とあいつは溜息をつきながら口を開いた。

「前から言っているが、お前は変わってるな」

「そうか？いたって普通だと思うけどな、友人の死を悼むのは人間として当然だよ」

「友人？お前の言う友人は世間から見たらただの知人だ」

「何回か話した事あるんだから、友人だよ」

「何回かしか話した事無いんだろ、立派な知人だ。否、知人以下かもな相手はきつとお前の顔も名前も覚えていない。その程度の奴が死んで感傷に浸れるお前は十分変わり者だ。もちろん俺とお前の関係もただの友人、それ以下はあってもそれ以上はない」

「酷いなあ。じゃあ何で一緒に帰るわけ？」

「友人だから」

「ふーん」

他愛無い話をしていると開けた通りに出た、ここで僕達は別れた。

「じゃあな」

「うん。また明日」

あいつ自身が友人だと言ったところで、僕から見れば親友なのは変わらない。

あいつもそれ分かって言ってるわけだし、引き分けてことかな。

空がいつそう紅く染まった。



## 巻・前置き長し

さてさて、この世界に痛みが好きな人間はいるのだろうか。

まあ、俗にマゾなどと言う物理的な痛みを好む人達もいるが、その事はこの際関係ないだろう。

なぜなら僕の言う痛みは物理的なものではなく、精神的な痛みの事を指しているからだ。

例えば、家族、親友、友人の死などこれに当てはまるだろう。

直接自分が被害を受けたわけではないが、かなりの時間立ち直れないぐらいの被害を精神が受けることになるだろう。

なんだか暗い話をしているようだが、別に僕の家族が死んだわけではない。ちゃんと両親ともピンピンしている。

親友が死んだわけでもない、53人ちゃんと生きている。

友人は4人ほど死んでしまったがそれは、随分昔の話になるのもう立ち直っている。あとの149人は生きているし。

そんなわけで、人間ならば痛みを嫌うのは当然。皆嫌いなのだ。

だから僕が痛みが大嫌いなものなら問題ない。普通の事だ。

そう、僕はいたって平凡な生活を送っているただの高校生だ。

だから平凡な僕にはこの状況をどうにかする術が無く、どうすればいいかの知識も無い。

こんな状況は生まれて初めての事だ。

本当に訳が分からない。

今僕の目の前に目がある。

誰の目なのか、知っている人間なのか、むしろ人間なのか、こころも至近距離だと全く分からない。

「もしもし、反応してくれないとつまないけどな」

声が出たかと思うと目しか見えなかったのが、徐々に人型になってきた。

それもどうやら腰を曲げていたらしく僕より背が高い。それでも170あるんだけどな。

「…何か言つてよ。一人で喋るとか痛い子じゃん俺」

僕が何も言わないからか相手からは不満の声が上がる。

そこでようやく相手に焦点が合ってきて顔がちゃんと見えてきた。

綺麗な顔立ちをしている。

しかも男。

これで、突然部屋に美少女がっ！！な漫画的展開への期待は崩れ去った。

まあ、もともとそこまで期待していた訳ではなく、のりで思っただけだけど。

「僕が主人公じゃ役不足か・・・」

「喋れたんだ、吃驚した」

いきなり喋ったことに相手は驚いてる、お前さっき何か言えっついでたじゃん。

そっぴえば何でコイツここに居るんだよ、こっぴて俺の部屋だぞ。不法侵入にしては堂々としてるし。

よく見ると奴は靴を履いている、外国の人か・・・。

僕英語大嫌いなんだけどどうしよう英語喋れないっぴて。

いや中国とかだったら漢字で何とかなるかも。

待て待てそんな言語の心配しなくてもさっき日本語喋ってたじゃん。どうやらさっきまでの思考は無駄だったようだ。

こんな考えなくても分かるような事に気付かなかったなんて、そんなに混乱しているのか僕は。

自分は凄まじい事が起こらない限り、そっぴそう混乱なんかしないと信じていたんだがどうやらそれは過大評価し過ぎだったようだ。

これからは改めようと思っぴ。

こんな状態で不法侵入美形外国人日本語可な人に対応できるのだからうか。

どうしよう。自信が皆無だ。

## 壺 - 外国の水道水には注意

とりあえず僕はこの不法侵入美形外国人日本語可な人にお茶を出すことにした。

一応この人のおかげで自分がどれ程自身を過大評価していたか気づいたわけだし。

というわけで今テーブルを挟んで僕と不法（略）の人はお茶を啜っている。

「・・・何でお茶出してるの？」

「感謝のお礼です。あ、やっぱり紅茶とかの方がよかったですか？」

やはり外国の方に日本茶はまずかったか。

抹茶が外国で結構人気があると風の噂で聞いてたから、抹茶が大丈夫なら日本茶もいけるだろうと思ったのだが。

けど家には日本茶しかないんだよな。困った。

「水道水なんていかがですか？外国のよりは安全だと思うんですが」  
「別にこのままでいいよ。それよりいいの？こんな怪しい奴にお茶出して」

「あー・・・もしあなたが悪い人じゃなかったら、僕が悪意の無い人にお茶すら出さない礼儀知らずな子だと思われるのは不本意なんです」

確かに勝手に部屋に居た人とお茶を啜るなんて、親にばれたら怒られてしまう。

ただお客様にはまずお茶を出すように躡けたのも親なわけで、どっちを優先していいかわからないのが本音だ。

それになんか大丈夫そんな気がする根拠なんかないけど、しいて言えば僕の勘かな。

ここで勘が外れて僕が殺されようとも、僕の勘がそこまでだったって事だ。

けど痛いのは嫌だな、痛くないのがいいな。

「ぶつくくく・・・そつかあ、そうなんだあ・・・ひひっ」

不法（略）さんは何かがどこかのつぼに入ったらしく、綺麗な顔を思いつきり歪めて豪快に笑っている。

それにしても笑いすぎなんじゃないか、腹抱えてるぞ。ほっとくと転がり始めそうな勢いだ。

「あのお、そろそろ話していただいてもいいでしょうか？」

このままじゃ話が進まないの、僕は不法（略）さんに声をかけた。

「ぶははっ、うん。俺礼儀正しい子好きだよ」

「いや、別にあなたに好かれたいわけじゃないんで。それよりなんで僕の部屋に居たんですか、その話をお願いします」

「あ、そうだったね」

不法（略）さんは姿勢を正して僕と向かいあった。切り替えは早いようだ。

やっと話が聞けるのか、ここにいたるまでが凄まじく長かった気がする。

「じゃあまず、君が香山菊き君だよ」

何故僕の名を知っているんだ。新手の勧誘か何か。勘外れたな。僕そついつの断るの苦手なんだよな・・・なんか向こうも必死になつてるし。最終的には断るけど。

「何も言わないってことは肯定って事で話し進めるよ」

「あ、すみません。僕そついつの興味ないんで諦めてください」

「・・・うん。どんな勘違いしてるかわかんないけど取り合えず話を黙って聞こうか菊吉君」

「いや、どんなにお話されても無理なんで次の家に行った方がいいと思いますよ」

「まず、黙ろうね。お口チャック」

「・・・」

美形はどんな恥ずかしい事しても大丈夫なんだな。さすが美形、様になつてる。

ここまでされたら黙らないといけない気がしてきて、話が終るまで黙ることにした。

「よくできました」

僕が黙ると満足そつに笑って、話始めた。

「実は俺ある人に言われて、君を迎えに来たわけ。だから

俺について来て

「はいお話終りー。あ、質問ある人挙手」

「・・・」

「はい、菊吉君。俺に答えられる質問にしてよ」

「話ってそれだけですか？2行ぐらいで終わっちゃうんですけど。ついて来いって何処に？宗教の本拠地？あなた外国のかたですよ？外国の方じゃどうか知りませんが無断で人の家に入るのって不法侵入で犯罪なんですよ、日本では。ちゃんと日本の文化も勉強しておいてくださいね。あ、そんな事よりも大事なことがあります。まず取り合えず今すぐに

靴を脱いでください」

## 壱・油断大敵

今まで疑問に思っていたことを一気に喋り喉が渴いてしまったのでお茶を飲んで喉潤す。

なんだか不法（略）さんは啞然といった感じでお茶を飲む僕を見ている。

心配になって目の前で手を振ってみたら、目が見開いた。どうやら気がついたようだ。

「あ、ごめんごめん。それにしてもよく喋るね菊吉君」

「こんなに喋ったのは久々ですよ。それより靴」

「おっと、そうだった。けどこの靴綺麗だよ、土とか一切着いてないから」

「どんなに綺麗でも失礼ですよ」

ちえ、と言って奴は渋々靴を脱いだ。確かに綺麗だ、まるで一回も履いてない感じ。

「これどこに置いたらいい？」

「横に置いておいてもいいですよ。それより何でそんなに綺麗なんですか？」

「それはね、ひ・み・つ」

語尾にハートがついているんじゃないかと思うぐらい満面の笑みで笑いかけてきた。

女の子が居たら確実に顔が真っ赤っ赤になってるよ絶対。

けど生憎僕は男の子真っ青になるならまだしも間違っても真っ赤っ赤にはなりはしない。

「靴の事は置いて。俺の自己紹介でもするとしますか」

「その前に僕の質問に答えてくださいよ」

「菊吉君の質問は何か答える気無くなっちゃった」

自分勝手にも程があるだろ。

自分から質問無いかとか聞いてきたくせに。

あんなに僕に喋らせて、結構疲れるんだよな・・・どうしてくれるだよ。

「まず俺の名前ね。俺の名前は・・・」

「ちよっと待って下さい」

「え、どうしたの？いきなり」

「いや、ちよっとお菓子持ってきてますんで待っててください」

この人の言葉を遮って僕は席を立つ。

その話の流れは危険だ、名前は駄目なんだ。

これが普通の自己紹介ならば全然構わないのだが、この人は人生においてあまり関らない方がいい種類の人間だ、できれば名前を聞かずに生きていたい。

ぐるぐる考えてたら、いつの間にか手にお菓子を持って戻って来てしまった。

戻ってくるまでに名前を聞かずに済む何かいい案を思いつく予定だったんだけど・・・所詮予定は未定か・・・。

「あ、おかえりい」

「はい、煎餅でいいですか？」

「ん、何でもいいよー俺好き嫌いないから」

「そうですね、それはよかったです。では話を続けましょうか、たしか何故僕の部屋に来たか、でしたよね」

「あ、そうだったね。何故君の部屋に来たか・・・」

「はい、何故ですか？理由がとも知りたいです」

「それはね・・・ん？いや、それだっけ？えーっと・・・」

「違いますよ、あつてます。何故僕の部屋に来たのか、教えていただけませんか？」

「あ、そうだった。その話は後でしようと思つてたんだよ。今は俺の名前だね」

失敗したみたいだ。途中まで上手くいつていたんだが。

人生なかなか上手くいかないものだ。さてどうしたものか・・・

「俺の名前は×××××・・・×××、××××××！！・・・×××××」

この人が名前を言おうとしたとたん僕の耳が一切の音を拾わなくなったのか、もしくはこの人の声が出なくなったのか、目の前に居る人は口をパクパクしながら僕の方に手を伸ばしてきた。

手が顔の前まできて、顔を通り越して耳のほうへやってきた。

ベリッ

「なんで耳塞いでるのかな？」

迫ってきた手によって僕の耳の上にあつた手を剥がされてしまった。止められないのなら聞かなければいい、結構いい案だと思つたんだが・・・。

普通は自分の話を聞かないかつたり聞こうとしなかつたら怒るだろうが、この人は怒るところか満面の笑みでこつちを見ている。

「そんなに名前聞きたくないの？」

「はい。出来れば、そちらも言わない方がいいかと思ひます」

「そっか・・・じゃあそうするよ」

・・・なんだ正直に言ってしまったえば良かったのか。  
無駄な時間を使ってしまったが結果は満足いくものなので良しとし  
よう。

僕が成功した達成感に浸っているとまたも手が伸びてきた。  
もう耳の上には何も無いし一体何がしたいのかと思っていると、手  
は僕とあの人のだいたい真ん中辺りで止まった。

握手しよ、と言ってきた。

「握手も駄目？」

僕が戸惑っているところとちょっと落ち込んだ感じで確認してきた。

「いや、全然駄目じゃないです」

正直何故握手するのか理解できないけど、名前を名乗るのも駄目で  
握手も駄目なんてとてつもなく嫌な人間になるつもりも無いので僕  
も手を前に出して握手をした。

「これからよろしくね。香山菊吉君」

相手の手に力が込められた。

「俺木月総樹よろしく」

ギュッ

さらに力を込められた。

名前を聞いてしまった。

今日、友人が149人から150人になった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4462g/>

---

彼岸花は散る

2010年10月13日06時30分発行